
山の声

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山の声

【Nコード】

N6516T

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

行きと同じ登山道を下りていたはずなのに、気づけば道を見失っていた。

何処かも知れない山の中。ふいに声がし、辺りを見回すと、木々の間から黒い影がこちらを見ている……追いかけてくる……！

（前書き）

山には神様がいますという話を聞いたことがあります。

だから、山に入る前には身を清め、立ち入る際には一礼した方が良
いそうですよ。

ところで、神様だけなんだろうかね、山にいるのって……。

職業柄、色々な話を収集するのが癖なのだが、その中でも、収集率が良くて、私個人も特に注目しているのが、怖い話である。

これは、ある居酒屋で知り合った方が話してくれた、出来事である。

Aさんはドライブが趣味で、なにかと時間を作っては、海へ、山へと、よく車を走らせていたそう。そのときも着の身着のまま、これといった 目的地も決めず、山に向かった。

ナビによれば、山の中腹辺りを走っていたAさんは、ふと、行く手に登山道を見つけた。きまぐれに山登りでもしようかと思い立ち、登山道近くの駐車場に車を停めた。

Aさんのきまぐれはいつものことだそう。車にはあらかじめ山登りに必要なブーツやリュックなどの道具、食料類を入れてあったのだそう。

Aさんは山登りに必要な一式を身にまとい、登山道に入った。

頂上に到達したのは、だいたい二時間後のこと

アウトドアに慣れているAさんにとってはなんということもなかった。

山の頂上は見晴らしのいい展望台になっていた。平日ということもあり、登山客の姿はほとんど見られなかった。途中で何人かと挨拶を交わす程度だった。

展望台にはAさん一人。なんだか貸切のような気分がしたそう。他に人がいれば控えるのだが、せっかくと思い、Aさんは展望台に身を乗り出し、その見晴らしのいい景色に向かって声を上げた。

「ヤッホーッ！」

『ヤッホーッ！』

やまびこが答えてくれた。とてもきれいに聞こえたので、Aさんは何度か試してみた。その度に、やまびこは答えてくれたそうだった。

Aさんは満足し、展望台を離れようとした。そのとき、聞こえたそうだった。

『気をつけて』

その声は確かに聞こえたそうだった。思わず、
「え？」

と、後ろを振り返ったという。

しかし、後ろには誰もおらず、見晴らしのいい景色ばかりが広がっていた。

空耳だろうか？

Aさんは自分の耳を疑いながらも、登山道を降り始めた。
登山道は一本道だった。……一本道のはずだった。

しかし、気づくと、そこはどこかもわからない森の中だったそうだった。

辛うじて光が漏れるほどの深い森の中。看板を目印にして歩いてきたにもかかわらず、いつの間にか迷ってしまっていた。

「あれ、おかしいぞ……？」

登ってきた登山道を逆に降っていたはずなのに、気づけば、地面は平坦に。あるはずの道も見失っていた。

Aさんはすぐにおかしいと気づいた。ふと余所見をしたそのとき、そこはもう森の中だったからだ。まるで、夢を見ているような気分だったそうだった。

「キツネやタヌキにでも化かされたかな……？」

まだどこか余裕のあったAさんは、辺りの様子を見渡しながら、苦笑いを浮かべていたという。……だが、すぐに笑えなくなった。

あるものを見た

Aさんはそう言うと、言葉にはせずに、居酒屋にある紙ナプキンに、アンケート用にと置いてあった安っぽいペンで、ある絵を描いてくれた。

黒く塗り潰された人影のような形をした、白い、二つの眼のようなものがあるそれは、例えていうならば、黒いてるてる坊主のようだった。

必死になって逃げた

安っぽいペンを元あった場所に戻すと、Aさんはまたポツリと呟いた。

Aさんは仕切り直すように、再び、その出来事を話し始めた

木々の間から現れたそのなにかを見たとき、Aさんは直感的に逃げなければいけないと感じたそうだ。気づけば走り出していたらしい。

道を見つけられず、どこへ逃げればよいかわからず、しかし、そんなことなど気にもせず、ただひたすらに走っていたそうだ。

時々後ろを振り返ると、木々の間からそれが現れた。

気づけば、それは一つではなかった。いつの間にか、それはたくさんいた。

本当にたくさんいた。Aさんは力強く、そう言った。

それは自分を追いかけている

捕まってはいけない

Aさんは自分の直感を信じ、必死に逃げていた。すると、どこか

らか声がしたそうだった。

『逃げて』

声は地面から聞こえてきた いや、空から聞こえた 違う、すぐそばから聞こえてきた いや、どれも違う。声は、頭の中から聞こえてきた気がする

Aさんは何度も、一番正しい表現を探すように言葉を繰り返した。

『捕まってはいけない』

声がする。Aさんは走る。それは後ろから大群で追いかけてくる。そんなことが何度か続き、あるとき、また声がした。

『あれが出口です』

行く手に光が見えた。光の向こうに、森ではない景色が見えた。出口だ。これで助かる。

Aさんは後ろを振り返り、それがすぐ後ろにまで迫っているのを知った。すでに事切れそうだった気力を振り絞り、全力でひた走ったそうだった。

光はもう目前

光に届いた。助かった。

Aさんが光の彼方に手を伸ばしたそのときだった。不意に景色が開けた。

『ご苦労さん』

覚えているのはその声と、一瞬の光景だと、Aさんは言った。

見晴らしの良い風景
自分の右足が崖を踏み抜く、瞬間
遙か彼方に見える地面

一瞬、目の前が真っ暗になったと思うと、全身がひどく痛んだ。
いつそ、殺してくれと言いたくなるほどの痛みだったそうだ。
身体は動かず、声も出せず、見えるのは赤く濁った地面と思われる
岩の映像だけだった。しかし、耳だけは良く聞こえた。

『また、止められなかった』
『お願いだから、生きてくれ』
「もう、私たちのようなものを増やさないでくれ」

そのとき、不思議と首が動いたそうだ。なにかに操られるように
首が動いて、気づくと、自分が落ちたと思われる崖を見上げていた
そうだ。

切り立った崖の上から、あの黒いてるてる坊主のようなものが、
自分を見下ろしていた。不思議と怖くはなかった。なんだか、可哀
想に思えた。

ああ、そうか、彼らも、あの声に騙されたんだ
そう考えたのを最後に、Aさんは意識を失ったらしい。目の前が
真っ暗になったそうだ。次に覚えているのは、病室の景色だったそ
うだ。

それからしばらくして、見舞いに来てくれた恋人から教えられた
のだが、助かったのは奇跡だと医者から聞かされたそうだ。あの高
さから落ちたら普通は助からない。

いままでも何度か、あの場所で人が死んでいる。てつきり、今
回も自殺かと思った。警察はそう言っていたそうだ。

「きつとね、彼らが助けてくれたんだと思うんですね……」

酒の肴をつまみながら、Aさんは呟くように言った。

去り際、Aさんはこんなことを言っていた。

「山に語りかけちゃいけないよ。目をつけられるからね」
Aさんは車椅子に乗り、独り、夜の街へと消えていった。

（後書き）

いかかでしたか？　楽しんでいただけたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6516t/>

山の声

2011年10月9日03時27分発行